

健康文化

電子メール考

小林 邦彦

名大の医療短大で「電子メール」なるものが使えるようになってぼつぼつ3年になります。日々その恩恵にあずかっています。佐々木教祐先生や津坂昌利先生が、その環境整備、充実、維持、管理にどれだけ努力されたか、貢献は計り知れません。もちろん短大部・名大当局の先見の明や事務部の方々の努力も忘れてはならないでしょう。それにしても、短大のネットワーク環境（ハードとソフト）のレベルは名大の中でも、また全国の医療短大の中でも一、二の高さではないでしょうか。電子メールに関連したきわめて個人的ないくつかの問題について考えてみようと思います。

電子メールを使い始めて

たしか1994年の4月に、短大で電子メールが使えるようになったとお知らせがあり、さっそくアドレスを申請し、5月には講習会に出てtelnetのやり方を覚えました。学科の共通室にはMacintosh (Centris 660AV) と NEC(PC-9801 DA) と IBM(Premia)の機械が1台ずつ並んで居て、これがみんな学内LAN(NICE)に接続されましたので、使ったことのあるPC-9801で電子メールを始めました。毎朝それを開くのが楽しみでした。まもなく、短大の情報処理教育で使っていた富士通のFMR-80が貸し出されることになり、さっそく応募して借りることができ、自分の部屋にインターネットが通じることになりました。

さて、電子メールを始めて1年後に、電子顕微鏡の写真を知人から借りようとメールを打ったところ、なんと写真を電子メール経由で送ったという返事が来たのです。びっくりしてPC-98やFMR-80を開けても、モニターにはどこまでも続く文字の列だけです。それからあわててMacintoshを使えるようにして、電顕写真を見たときの感激！それ以後は、使い方を親切に教えてくれる人たちに助けられ、学科の機器としてもイメージスキャナーやパワーマックなどが増え、画像のデジタル化や画像処理が出来るようになりました。1995年秋に国立科学博物館で開かれた解剖学会百周年記念の特別展「人体の世界」にパネル

を出したのですが、写真は全部デジタル化し、医学部の共通機器（富士フィルムの Pictrography 3000）で印刷したものを使用しました。その後、そこで使った画像やワープロ文をちょっと加工（html 文化）して、「コラーゲンを見てみよう」という題で短大のホームページに載せていただきました。（URL:<http://www.met.nagoya-u.ac.jp/ECM/Home-kk-test.html>）。

コンピュータを使えば、マクロやミクロの断面画像を取り込み、この情報を積み重ねて三次元の立体的な形が見られるのも大きな魅力です。電子メールから始まって、こんなことが出来るようになりました。

ついでながら、今では、よそ（鶴舞や、東山や、他大学など）に行くときには、電子メール用のフロッピーディスクを持って行って、どこでもインターネットに繋がるコンピュータがあると使わせてもらって電子メールを開いて見えています。始めた頃にクラシックな機械を使ったおかげで、よそへ行っても、コンピュータの機種にかかわらず、いざというときには telnet で、電子メールが読めます。

通信手段としての電子メール

電子メールという通信手段は、私の性に合っているようです。まず、返事の宛名を書き写さなくても「返事」を選ぶと相手の宛先が自動的に入るのが良いですね。出ます。それに向こうの用件が引用できますから、何行目の何について賛成、異議あり、と言うのが即座に出来ます。もともとハガキでも手紙でも、直筆では芸術的すぎて（？）よその方には読めないと思うと、つついワープロで打って出すことになりますので、ワープロを打つところまでは差がないのです。ところが手紙は、本文を書き、宛名を書き、封筒に入れ、切手を貼って、あとは帰りに通りがかりのポストに投函しようと、机の端においたり、ポケットや鞆に入れて、すっかり出したつもりになっていることがあります（これは今に始まったことではない）。以前から、個人的な郵便物は、とりあえず受領したことを相手に伝えられるように、受け取ったその日にハガキにワープロで印刷した受取通知書に、受け取った物と日付とを書き込んで出すようにしていました。せっかく書いてもポストに入れなくては、自己満足もいいところです。電子メールでは、読んで返事を書いて発信するまでがすべてその場で出来ますので、持ち歩いて出したつもりになる習性の私にとっては、なくてはならない通信手段と言うことになります。もちろん、いまでも切手の貼ってある郵便物を受け取るのは楽しみですが。

電子メールが私の性にあっていて最大の点は、何といても、情報が文字に

なっていることです。大事な内容は文字にすべきだ（文字になっていないと忘れる）、というのが私の主義（性格、能力？）です。目を通して文字を読まないで、覚えられないのです。聞いただけで覚えられることが、きわめて少ないのです。それで、人間が物を忘れるのは当然だ、と開き直っています。忘れたときには書かれてある資料を出して読み、それで再確認します。それを何度かの繰り返すと、もうその資料を見なくても思い出せるようになります。新学期は、まず学生の名前を覚えるのに一苦勞です。名簿の順番や、五十音や、出身地や、趣味などと結びつけて覚える努力をしますが、私にとっては、これも名簿があって初めて可能なことです。でも、世の中には、音声情報だけで記憶していける人も居るんですね。驚きです。感心してしまいます。

FAX も、文字で届けられるので、私は助かります。電話で細かい話（初めての人の住所・氏名や機械の型式番号など）を聞き取るのは、何とも心許ないのです。聞き違い、思い違いがしょっちゅうありますから。「うちゅうじん」と「うちゅうせん」は、「宇宙人と宇宙船」かもしれないし「宇宙塵と宇宙線」かもしれないのですが、聞く側が別の可能性をまったく思いもかけない場合には、その自分の判断を疑うこともできないわけです。医学用語には、ややこしい、紛らわしい、同じ発音の用語がありますね。「子宮体」「糸球体」「四丘体」や「胸骨」と「頬骨」、「橈側」と「頭側」、「足底」と「測定」。「好調」「紅潮」「高張」「硬調」「校長」などなど。

情報発信センターとして

コンピュータに入っている文字情報は、読めて、印刷でき、保存できるだけではなくて、電子メールでは他の人にもすぐそのまま伝えられます。コピーしてメールボックスに入れる手間が省けます。よそから得た情報を、まだ知らないかもしれない人にせっせと転送しています。転送するのもそれなりに意味はありますが、もちろん、それに加えて、何とかオリジナルの情報を発信できるようにしたいものです。

大げさに言えば、「情報の共有」は、科学にとっても民主主義にとっても、出発点であり前提条件です。電子メールが使えるようになって、いろいろな情報を、学科内、短大内や研究仲間の間などで交換可能になりました。短大内では、宛先に itan と入れれば教官全員と各掛に一度に届くようにしていただきました。さっそく短大内の行事予定を知らせあおうと提案し、以来、各学科のボランティアによって毎月 itan calendar が発行されています。itan を使って、もっと学術的な交流も活発にできたらよいと思っています。たとえば、自著紹介（最近

出版した著書の紹介や論文アブストラクトの in press 段階での紹介) や、近着雑誌からの論文紹介など。散発の発信を期待するより、Monthly Newsletter (月刊紀要) のようなまとめて出すものの方が、継続性があるでしょうか。どなたか、活発に論文を書いている方が音頭をとってくださるとありがたいのですが。論文の抄録や紹介文(業績の概要)は、みなさんワープロで作られてフロッピーに保存していることが多いでしょうから、出し合ってまとめるだけなのですが。

入力ミスと個の識別

「このあいだのあれー」「あの論文」「例のやつ」などと言われると、「え、どのこと?」ととぼけ、いわゆる「あうんの呼吸」の通じない私です。コンピュータが、似た文字でも違うものは違うと撥ねつける頑固さに似てますね。コンピュータの頑固さは、約20年前に、Fortran でちょっとしたプログラムなるものを始めたときからおつきあいがあるので、私にとっては違和感はありません。当時、今ではパソコンで出来るような簡単なプログラムの、その1行分を1枚ごとカードにパンチして、そのカードを順番に並べてカードリーダーで読み込ませ、それらのカードを何十枚も箱に入れて計算機センターと職場の間を往復したことを思い出します。プログラムがうまく働くと、結果を打ち出した紙が折り畳まれて送られてくるのにもちょっと時間がかかるのですが、第1回目の run がすぐに出てきてしまったのは、「数字の1とアルファベットのエルの小文字、数字の0とアルファベットのオー」の類の打ち間違いでした。エラーになって当然です。

じつは先日、「医学のあゆみ」の連載に、名古屋大学医療短期大学のインターネットのホームページの紹介を書きました。次はその一部です。

それでは名大医短のホームページを開いてみよう。画面上部の四角いボタンの中の Open を押すと、Location の枠が現れる。ここに名大医短のアドレス <http://www.met.nagoya-u.ac.jp/> を入力し、Open をクリックすると、医療短大の門標と帽子をかぶった少女の横顔が現れるはずである(図1)。どこか特定のホームページを開ける際によく失敗するのはアドレスの入力ミスである。世界中にクモの巣のように張り巡らされた情報網(www)の倉庫(www サーバ)から、たった一つのそれを見つけだすのだから、スペルどころか、ピリオドとコンマ、数字の1とアルファベットのエルの小文字、数字の0とアルファベットのオー、大文字と小文字の区別など、

どれ一つ間違っても「そんなものはありません」とはねつけられる。アドレスの途中にスペースは不要だ。記号・文字の正確な入力で、特定のアドレスへの接続（アクセス）の問題はまず解決する（アドレス入力のこの程度の厳密さは、医学・医療に携わる者にとっては必須のことで、同姓だからと別人を手術したような医療事故は論外だ）。

入力ミスについては、コンピュータの使い初めに経験した自分の初歩的な失敗を書いたものです。引用の最後のカッコ書きが唐突に思われるでしょうが、今から10年くらい前にあった医療事故を、つい思い出したのです。命に別状はないものの、私自身、同姓同名で取り違えられた苦い経験があったり、また、一人で丁寧に解剖を続けていた大切なご遺体が、まちがって他人に解剖されてしまったこともありました。「人間一人一人はそれぞれ別の個体だ」という認識は、医療・医学の原点というか、医療に携わる人の出発点の一つだと思います。病気ごとに処置が違うのは当然ですが、同じ疾患であったとしても、個々の患者を見たワンパターンでない対応が、患者の期待するところです。「一人一人を区別してほしい」ということが、幸か不幸か医療する側に身をおいたことのない私の切なる気持ちです。

教えられ上手

医療短大の電子メールシステムが使いやすくなっているのは、何ととっても、佐々木先生、津坂先生が、労をいとわず、親身に、みなさんに使い方を教えられ、トラブルのある度に出かけては、問題を解決されたからでしょう。私も、何度となく初歩的な質問をして、その度にお二人にいやな顔もされずに教えていただいたものです。教育でもそうですが、教える側が、初歩的な質問に対して「こんなことを知らないのか」と言ってしまうのは、そのシステムの発展はありません。教えられる側も、頼るべき人が周りにいない場合には仕方ないとして、「自分で本を買ってきてこっそり勉強して、周りを驚かせてやろう」などと考えないで、先達に教えを請うことが大事でしょう。他人に遠慮なく尋ねる点では自分をほめてやりたい！もちろん、私の知っていることで少しでもあなたのお役にたつことがあれば、喜んでお教えしたいと思っています。ハードを含め、電子メール環境の格差をなくすことが最大の課題でしょう。

(名古屋大学医療技術短期大学部教授・理学療法学科)